

猫にもエイズ

健康な「外猫」

1割が感染

日本獣医畜産大で統計

狭い都会、けんかで広がる

猫のエイズ(FIV)がまん延している。日本獣医畜産大学助教授の石田卓夫氏(41)が統計を取ったところ、家の外を歩き回る健康な「外猫」のうち猫エイズウイルスに感染している割合は二・四％、ほぼ十匹に一匹になることが分かった。猫エイズは人間のエイズとほとんど同じメカニズムで発症に至るが、人には感染しないのがせめてもの救い。現在のところ人のエイズと同じで治療法がなく、石田助教授らは愛猫家に注意を呼びかけている。

人にはうつらず

二・四％という数字の根拠は、一九八八年から一九九一年までに同大学の付属病院に去勢手術のため来院した健康な飼い猫四百二十匹の血液をFIV検査にかけた結果、五十二匹から陽性反応が出たことだ。病気ではないかと連れてこられた七百九十四匹を検査した場合の陽性比率はさらにハネ上がり、四三・九％に達している。

傷が治りにくくなるのもエイズにかかった猫の特徴



これらは飼い猫を対象にした調査で、飼い主のいない野良猫を含めた場合、感染率は上昇することが予想される。感染猫は大きさはみてオスがメスの二倍だが、これについて石田氏は「狭い都会で自分のテリトリーを侵されたオス猫がけんかをしてくみ付き合い、だ液を通じてウイルスを広めている」と話す。事実上、外に出歩く猫は「すべ

てがハイリスクグループ」(石田助教授)という状況だ。

猫のエイズは一九八六年にアメリカのカリフォルニア大学でウイルスが分離され、存在が確認された。その仕組みは人間のエイズと全く同じ。逆転写酵素を持つレンチ型レトロウイルスだ。免疫機能を破壊し、最終的にはいろいろな細菌が感染する日和見感染などで猫を殺す。感染した猫はウイルスの侵入に急に具合が悪くなる一カ月、一年の急性期を経て、無症状キャリア(Ac)期に入る。この期間は二三年続き、次に全

身のリンパ節がはれるPGL期が二カ月続く。やがてエイズの症状が現れ始めるエイズ関連症候群(ARC)期が一年あり、本格的なエイズ(AIDS)期につながる。エイズ期に入ってしまうは寿命は数カ月だ。

エイズウイルスに感染した猫で特徴的な症状は口内炎である。口内炎を起こしている猫の半分はエイズにかかっているといっても良いほどだ。また一度負った傷が治らず、傷口がいつまでも開いたままである場合や、下痢が止まらない時もエイズを疑ってみる必要がある。こうした現象について獣医学博士で総理府の動物保護審議会専門委員の小暮規夫氏は「エイズが目立ち始めた以上、猫は家

の中で飼うように、これまでの発想を改めるべきだ」と話す。エイズ抗体反応が陽性と出ても「発病して死ぬまでには五十六年かかる。猫の寿命は九年くらいなので病状に対して十分に対症療法をしてやれば長寿らせる」とアドバイスをしている。